

輸送船崎戸丸と衝突して沈んだ上海丸

黒江 修

昭和十八年十月下旬、南方戦線に派遣される陸軍の将兵と兵器物資を満載して四隻の駆逐艦に護衛された十三隻からなる輸送船団が、山口県六連島沖に集結した。私は、濠北派遣第四六師団先遣隊（隊長以下三百一名）の一員として崎戸丸に乗船していた。崎戸丸は、一万九千九百屯の新鋭船で、昭和十七年六月、アッツ島上陸作戦に参加し、船内各所にそのとき受けた生々しい弾痕が見られ、自ずから身の引き締まる思いにかられた。船団の中に一際目だって大きな船が見られたが、その船はかつて我が国の捕鯨船団の母船として

活躍した二万二千屯の凶南丸であった。堂々たる船団は、十月二十八日、六連島の泊地を出帆した。この頃、すでに、アメリカ潜水艦が九州近海に出没しつつあったため、出港当初から対潜見張りを厳にし、全艦船ともジグザグ航法を取って進んだ。それに加えて夜間は嚴重な灯下管制が敷かれた。

当時、長崎・上海間の定期航路の客船として就航していた上海丸（一万屯）は、たまたま、上海からの引き揚げ邦人約八百人を乗せて長崎に向けて航行中であつたが、十月二十九日午前四時頃、五島沖（推定）に

おいて、不運にも、崎戸丸に衝突した。衝突の原因は、暗夜でしかも両船共、灯下管制下に、ジグザグ航法を取っていたことが主因ではなかつたかと思われる。

崎戸丸における対潜見張りは、将校一人、下士官一人が一組となつて、船橋の前部に二組、後部に二組が二時間交替で見張りを続けた。私は、同じ師団司令部付きの軍曹とペアを組んで、初回の立哨（たちみはり）は二十九日午前二時から四時まで前部船橋に立った。私は、皿のように見開いた両眼に双眼鏡の対眼レンズを押し当て、白波を立てて崎戸丸目がけて驀進（ばくしん）する敵潜の魚雷を、万一、見落とした場合のことを考え、瞬時の油断も許されない見張りを続けた。やっと、緊張した二時間の勤務を果たし、次番者に申